

## シャルロット・デュマはなぜ馬と少女を撮り続けるのか

小山登美夫ギャラリー六本木と天王洲の2会場で個展「Ao 青」が開催中のシャルロット・デュマ。馬と少女を被写体に写真と映像作品を手がける背景、インクドローイング作品に込めた思いなどを聞いた。

美術手帖 supported by  
GMOクリック証券



Q | PREMIUM | MAGAZINE | EXHIBITIONS | ARTISTS | BACK NUMBER



シャルロット・デュマ



大きい画像で見る

[2020年に銀座メゾンエルメスフォーラムで開催された個展「ベゾール（結石）」](#)で、2点の映像作品《Shio 潮》《Yorishiro 依代》に染色家のキッタユウコが琉球藍で染めたオーガニックコットンや同タイトルの写真作品、さらには球状の立体作品を思わせる馬の体内で見つけた「結石」などを組み合わせてインスタレーションを展開したシャルロット・デュマ。小山登美夫ギャラリーの2会場では、六本木で写真とインクドローイング、小映像作品を、天王洲で本編と呼べる映像作品《Ao 青》を組み合わせた複合的な展示を見せる。映像を軸に3部作を展開した彼女は、「すべてがオーガニックに進んだ」と語る。

### 2014年、日本の在来馬との出会い



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



——日本の在来馬を撮影したのが2014年だと伺いましたが、その経緯を聞かせていただけますか。

シャルロット・デュマ（以下、デュマ）話を遡ると長くなってしまいますが、ふたり目の娘を妊娠していた頃に、林業で利用される馬に興味をもってイギリスで撮影するようになりました。キャリアの初期から動物を撮り続けていましたし、私が住むオランダからも遠くないイギリスで研究されている新たなエコロジーのあり方や、サステナブルな林業への関心もあったことがきっかけです。そこで撮影するチャンスを得ると、イギリスの林業で働いていた馬が、アメリカのアーリントン国立墓地（注：米軍が運営する国立の戦没者慰霊施設で、軍馬たちは兵士の棺を運ぶ伝統的な埋葬式に従事する）にもいることがわかり、アーリントンでも撮影することができました。

そしてそのイギリス人の林業者から、馬とともに林業に従事する方法を指導するために日本に行く予定だと聞いたのですが、ちょうど私もアーリントン国立墓地で撮影した作品を東京のギャラリーで初めて公開することが決まっていたので、日本で木曾馬を用いて林業に従事する人物にコンタクトを取るチャンスではないかと感じたのです。また、作家で環境保護活動家でもあるC.W.ニコルさんと知り合うことができたのですが、彼からも日本には8種の在来馬があり、まず木曾馬という長野の馬を撮影してはどうだろうかと勧めていただきました。侍が使用していた種であり、人との関係も古い馬なので絶対に気に入るはずだから、と。実際にとても美しい馬でした。これは続けようと、日本の8種の在来馬を撮影するきっかけとなったのが木曾馬との出会いでした。



——現存する8種の在来馬（長野・岐阜の木曾馬、北海道の道産子、宮崎の御崎馬、対馬の対州馬、愛媛の野間馬、トカラ列島のトカラ馬、与那国島の与那国島）の撮影を続け、《Shio 潮》《Yorishiro 依代》といういずれの映像作品も与那国で撮影されました。なぜ与那国だったのでしょうか。

デュマ 与那国という島に恋に落ちたきっかけは、この島だけに長く暮らし続ける与那国馬を魔法のような存在だと感じ、その動く姿を映像に収めたいと思ったことが始まりです。しかしながら、与那国での撮影を始める動機は馬たちの存在でしたが、馬も含めた島そのものへの興味が大きくなり、クブラバリの神話について調べてゆくと、島の闇の側面にも行き当たりました（注：久部良地区の岸壁に、幅3メートル、深さ7メートルほどの岩の割れ目が15メートルに及び続いており、18世紀の琉球王朝時代、人口を調整するために妊婦をその割れ目に連れて行き、飛び越えられたものだけに出産を許すという口減しに、その場所の神話が転用されたと言われている）。同時に「ゆず」という沖縄生まれで愛馬の「うらら」と日常をともにする少女との出会いもあり、フィクションの要素が頭の中で膨らんでいったのです。

### 3人の少女に託す想い

——《Shio 潮》で主人公となるゆずと愛馬のうららですね。

デュマ ゆずとの出会いは、彼女を主役にする事で、この土地を知らない人にとって、馬だけが生きる島にひとりの少女が暮らす、ファンタジーのような島に見えるのではないかと考えるきっかけになりました。そこから、ゆずが外国から来た少女に島を見せるようなプロットを考えましたが、私の長女であるエイヴィスがまだ7歳だったため私が考える設定としては幼いと思い、そのアイデアは保留にしました。信頼しているオランダの脚本家に相談し、一緒に与那国にも来てもらい脚本を仕上げ、長編の映画に仕立てるイメージを持ちながらもゆずとうららの撮影を開始しました。やがて撮りたまった素材を一度編集することにしました。完全なアート映像でもなければ、フィクションだともドキュメンタリーだともいえないような、セリフなしで少女と愛馬の非言語的なコミュニケーションを描いた20分ほどの映像作品《Shio 潮》はそうして完成したのです。



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より





小山登美夫ギャラリー天王洲にて上映の映像作品《Ao 青》より



——続く《Yorishiro 依代》は、馬の着ぐるみを着た少女がオランダから与那国へと向かい、そこで自生する馬たちと出会うまでを収めたロードムービーです。次女であるアイヴィが主人公です。

**デュマ** 《Shio 潮》の編集を終えた頃の話です。まだ5歳になったばかりだった下の娘アイヴィは、私にとってはまだ動物に近い存在でした（笑）。彼女が何週間も馬の着ぐるみを着て馬になりきっていたので、自分のことを馬だと信じている少女の物語の発想が生まれました。景色のなかを旅し、やがてたどり着いた与那国で出会った馬に親しみを覚える。彼女にとって家族との出会いともいえるのかもしれません。沖縄で出会ったテキスタイルデザイナーのキッタユウコさんに相談し、沖縄の自然素材による染織で馬の着ぐるみのような衣装をアイヴィのためにつくってもらい、彼女がそれを着て旅する様子を撮影したのが《Yorishiro 依代》です。

——与那国の少女が、外国から来た少女に島を見せるというプロットから展開があったのですね。

**デュマ** 最初のイギリスでの林業のリサーチに始まり、とてもオーガニックに人との出会いや土地からのインスピレーションを受けて物事は進みました。そして最初の一本の長編映像というアイデアが3本のショートフィルムになりました。2019年には上の娘のエイヴィスも9歳になっていたため、沖縄でエイヴィスとゆずがやり取りする様子も撮影し始めていました。

そうしたらコロナ禍となり、撮影構想を練り直す必要に迫られました。エイヴィスは本格的にダンスを始めていたので、ゆずの生活の本質的な要素としてうららとのコミュニケーションを収めたように、エイヴィスが踊る姿を映像に収めれば、やはり彼女の生活の本質的な要素と彼女らしさを見せることができると考えました。とても優秀な編集者と仕事をしているので、《Yorishiro 依代》からの3本で映像技術を学べていますし、《Ao 青》はもっともシネマティックな作品になったと思っています。



小山登美夫ギャラリー天王洲にて上映の映像作品《Ao 青》より





小山登美夫ギャラリー六本木 「Aoi 青」 展示風景より



——最初にクブラバリの話などをされ、与那国に恋したと同時に「複雑な感情がないまぜになった」ということを話されました。その感情は作品に投影されましたか。

デュマ 私自身、島と馬たちにはとても魅力を感じていたのと同時に、島の一部の男性からはある種の男性優位性のようなものを感じました。女性に対して支配的で高圧的に接する男性を見る機会がありましたし、多くの社会に共通して存在する問題ではありますが、どう説明したらよいかとても難しいのですが、日本の社会はとても.....。

——デリケートな話なので言葉選びに気を使いますよね。日本はとてもジェンダーバランスにおいて後進国ですから、感じるどころがあったのだと思います。

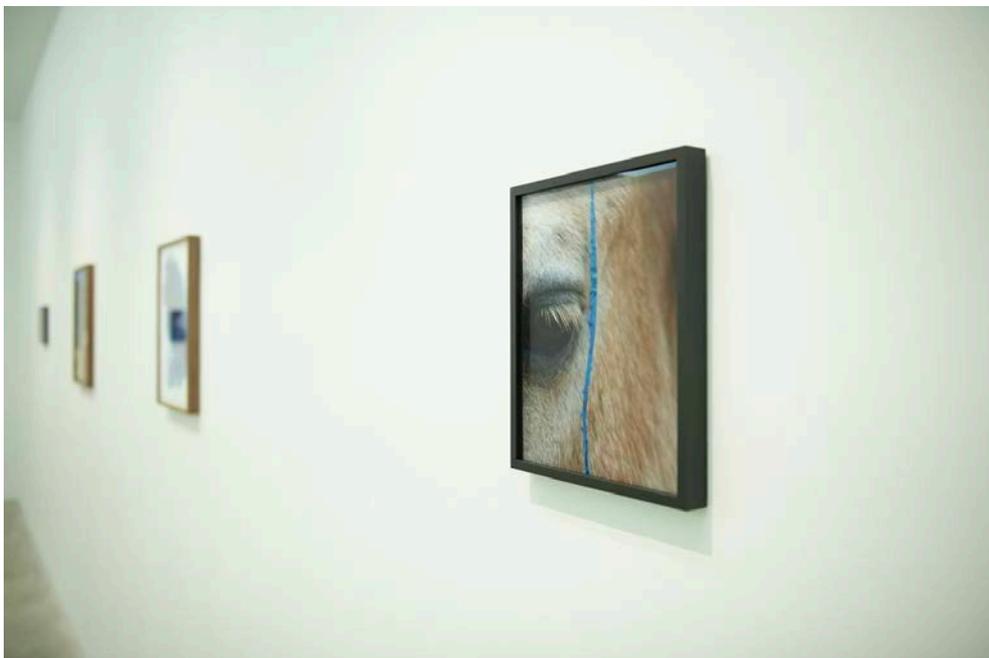
デュマ そうですね。私は作品に明白な政治的なメッセージなどを込める作家ではありませんが、ゆずとエイヴィスとアイヴィという3人の少女も含め、次の世代の女性たちをサポートしたいと思っています。未来に進むことに自信をもってほしいし、ポジティブでエネルギーでいてほしい。この3本の作品にそんな思いを表現できたと思っています。

——撮影を続けながら次のアイデアが生まれ、撮影した素材が編集されてそうしたデュマさんの思いが紡がれていったのだと映像から感じました。スチル写真での表現と映像において、編集というプロセスの違いがひとつあると思うのですが、編集を知ったことで撮影にも変化は生まれませんでしたか。

デュマ 最初は編集者に素材を渡してイメージを伝えると、「風景を撮った映像はありますか」と聞かれるわけです。ありませんよね、例えば、私にとっては馬が重要で馬だけを撮影しているわけですから（笑）。要するに、まだ映像言語や編集の視点で考えられていなかったのです。しかし映像を編集することになれば、馬の全身や寄りだけではなく、広い画面に小さく馬が見える場面も、馬が映っていない場面も必要です。それは少女たちにおいても同様です。そのような具体的で技術的なことも制作を通じて学びました。



小山登美夫ギャラリー天王洲にて上映の映像作品《Ao 青》より



小山登美夫ギャラリー六本木「Ao 青」展示風景より





## 墨絵から着想したドローイング

——「Ao 青」展では、映像と写真に加えてインクドローイング作品も展示されています。どのような経緯で制作されたのでしょうか。

デュマ 父が昨年12月に亡くなったのですが、彼はアーティストで、多くの水彩用紙をストックしていました。父がアルツハイマーを患い、2年間の自宅療養期間中は彼がもっていた紙に触れてはいけない気がしていたのですが、他界したあと、自由に再び絵を描きたい気持ちが生れました。子供の頃に父の影響もあってドローイングやペインティングが大好きだったので、子供の頃の思い出に浸りたい気分になったのかもしれません。



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



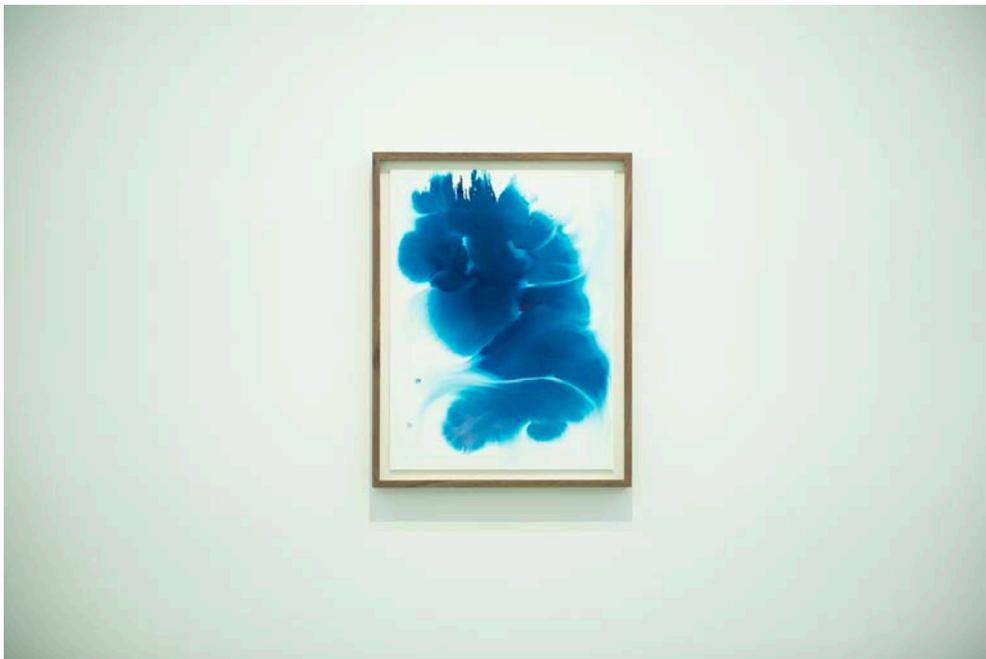
私はこの3部作で、対象を観察し続けるような感覚で撮影してきましたが、水彩インクでドローイングをしながら、それと同じ感覚を味わいました。インクと水が混ざり、紙の上で動きが生まれる。その様子に魅了されたので、筆を用いて、水と色のコントロールできない動きを観察し、紙の上に定着させることに楽しさを覚えました。ここには父が残したフランスの水彩画用紙に描いた作品と、小山登美夫ギャラリーが用意してくれた紙に来日してから描いた作品を展示しました。

——お父さんの作風からの影響などもありますか。

デュマ まったくと言えるほど逆の表現です（笑）。父はビルファサードなどを題材にとっても緻密な絵を描いていました。このサイズの紙に、コントロールすることが難しい水彩であれだけ緻密な絵を描いていたのはすごいことだと感じています。

——デュマさんの手法はどのように生まれたのでしょうか。

デュマ 私がインスパイアされたもののひとつは、東洋の墨絵です。現実の風景をモチーフにした具象的な風景画であると同時に、鑑賞者がそこに抽象的なパターンを読み取り、陰影やぼかしに感情を投影できるような側面が墨絵にはありますよね。そうした表現を参照しました。



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



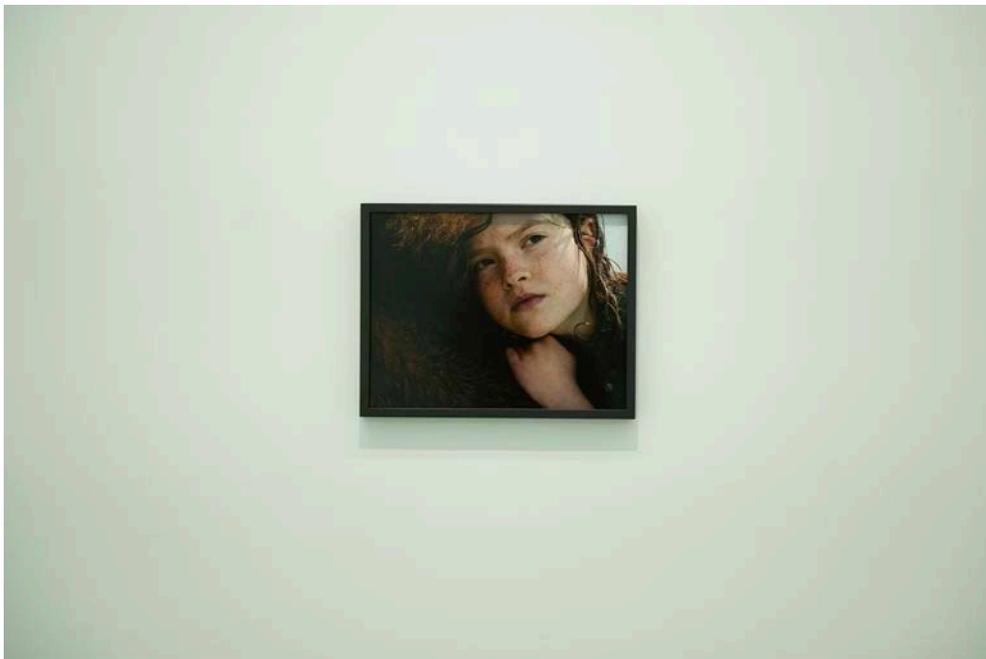
## 種を超えて

——馬と林業のリサーチに始まり、旅と出会いの繰り返しを経て、3人の少女とうららを筆頭とする与那国馬が主人公となる映像3部作が完成しました。この3部作以前から動物の撮影されてきたわけですが、動物自体への興味と、動物と人間の関係に対する興味とのどちらが最初にあったのでしょうか。

デュマ 当初は、純粹に動物を被写体とすることへの興味が撮影の動機でした。もちろん動物が好きだから、美しいと感じるから撮影したいと思うわけですが、撮影を続けるうちに、自分は種を超えた関係性に興味をもっていることに気づきました。動物たちと話し合うことはできないし、一方的に理解することさえも難しいかもしれないけど、見ているうちに自然とさらに惹かれていく。とても幼い頃から動物が近くにいることが好きだったので、それは、異なる種が言葉を使わずに共存することへの心地よさだったのだと思うんです。

——撮影を通してコミュニケーションをとるわけではなくても、言葉なしで同じ空間に共存するような関係が生まれることが心地よいですね。

デュマ 馬を観察し、撮影を続けていると、時間を忘れて没頭してしまうことがあります。そのとき私にとって馬の存在が当たり前になっていて、馬たちにとっても私の存在が当たり前になっている。触れ合うわけでもありませんが、馬たちが逃げるわけでもない。言葉を使わずに関係性が生まれているような、そんなところに心地よさを感じるのだと思います。



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



——では現在、馬に続いて興味をもっている動物はありますか。

デュマ いまは象のことをもっと知りたいと思い、プロジェクトのためのリサーチを始めたところです。東西の文化において、象がどのように表現されてきたのかに興味をもっています。象たちがどのように自分が生まれた土地からオランダや日本へと連れて来られたのか、そうしたことへの興味です。

——同じ土地に住み続ける在来馬から、人間によって移住を余儀なくされた都会の象へと興味の対象が大きく転換したのですね。

デュマ 考え方が大きく変わりました。日本で制作を続けて、出会いを重ねて様々な人たちとのかけがえのない関係が生まれ、今度はそこから日本をもっと知りたいと考えるようになりました。象と人の関係に意識を向けたとき、動物園などができて象が連れて来られる前の日本で、墨絵や木彫りで象がどのように表現されていたのか。そうしたことを考えるようになりました。1年ほど前にアムステルダム動物園のそばに引っ越し、映像と写真で象を撮影することから開始しました。彼らはアムステルダム生まれなので、都市の象です。日本でも同じようにリサーチを開始し、日本での制作に展開したいと思っています。今度は、象との関係をテーマとする私なりの表現がその先に生まれるはずで

——動物や人、土地との出会いが有機的につながり、作品としてかたちにしてきた《潮》《依代》《青》の3部作のように、象への興味を起点に作品がかたちになっていくことを楽しみにしています。では最後に、そのときにもおそらく観察をして撮影することが表現の軸になってくると思うのですが、写真とはあなたにとって何を意味するのでしょうか。

デュマ 振り返ってみると、私は世界をフレームに収めることに興味があったのだと思います。ファインダーを覗き、ある枠組みを設定すると、そこには何かが入ってきたり、そこから出て行ったり、動きが生まれます。それを目撃することが楽しくて写真を学び始めたのかもしれませんが。この3部作で動物や少女たちをテーマにした際も、いまでこそ手持ちでフレキシブルに追いかける楽しさと便利さを感じていますが、最初は基本的に三脚を立てた撮影ばかりをしていました。三脚を立ててフレームを決め、そのなかを動き、出たり入ったりする少女たちや馬たちをとらえることが面白かったからです。学生時代を終えて作家活動を続けていると、このような根源的なことを考えなくなってしまうから、よい質問だったと思います（笑）。



小山登美夫ギャラリー六本木 「Ao 青」 展示風景より



## Profile

### Charlotte Dumas

1977年オランダ・フラーレディングン生まれ。2000年にヘリット・リートフェルト・アカデミーを卒業後、ライクスアカデミーで学んだ。現代社会における動物と人の関係性をテーマに、20年にわたって騎馬隊の馬や救助犬など、人間と密接な関係を築いている動物たちを被写体としたポートレート作品を発表。人間生活のために特定の状況に置かれ、共生する動物たちを被写体とした作品を通して、私たちが動物や他者の価値をどのように定義づけてきたのかを問いかける。2014年からは、日本全国に現存する在来馬を撮影するプロジェクトを開始。北海道、長野、宮崎、与那国島など8ヶ所を巡って撮影した作品は、個展「Stay」（ギャラリー916、東京、2016年）で発表され、同名の写真集として出版された。また2020年には銀座メゾンエルメス フォーラムでシャルロット・デュマ展「ベゾアール（結石）」を開催した。

## Information

### シャルロット・デュマ展「Ao 青」

#### 六本木会場

会期：2023年3月10日～4月8日

会場：小山登美夫ギャラリー六本木

住所：東京都港区六本木6-5-24 complex665 2F

電話番号：03-6434-7725

開館時間：11:00～19:00

休廊日：日月祝

料金：無料

#### 天王洲会場

会期：2023年3月11日～4月1日

会場：小山登美夫ギャラリー天王洲

住所：東京都品川区東品川1-33-10 Terrada Art Complex 4F

電話番号：03-6459-4030

開館時間：11:00～18:00

休廊日：日月祝

料金：無料

編集部

## あわせて読みたい

---



シャルロット・デュマの個展「ベゾアール（結石）」が銀座メゾンエルメスでスタート。人間と自然の関係を考える契機に

NEWS

2020.8.27 [🔖](#)

---

[#シャルロット・デュマ](#) [#小山登美夫ギャラリー六本木](#) [#小山登美夫ギャラリー天王洲](#)